

Centimetres

# KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

**Kodak**  
LICENSED PRODUCT

3/Color Black

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

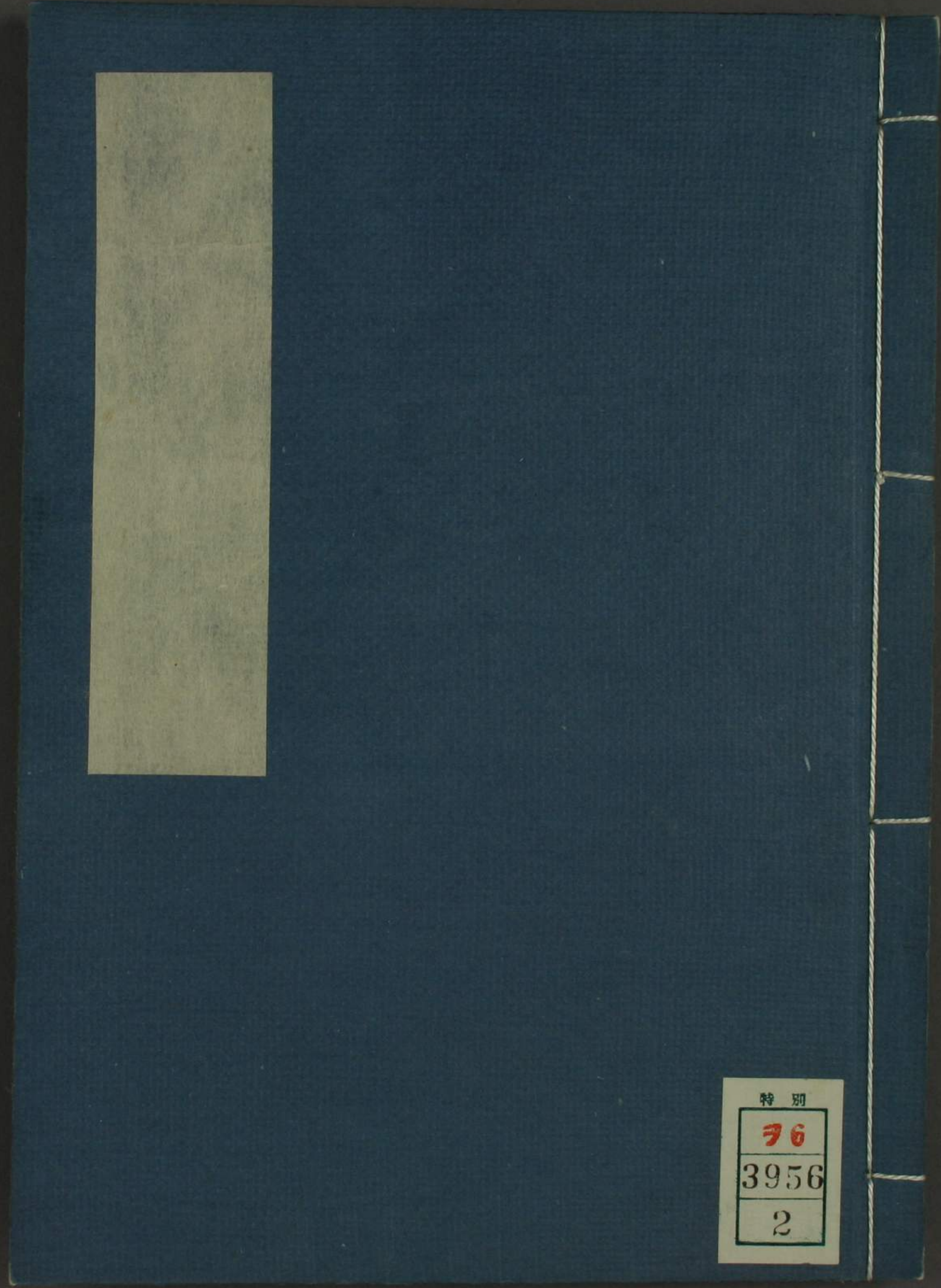
Black

**A** 1 2 3 4 5 6

**M** 8

**B** 17 18 19

特別
76
3956
2



前統の山崎(三)の末に引いた湛慶阿闍梨  
 が不動尊の夢告に據り已れを階上す  
 べき女の幼時恣入て其女兒を言し  
 後年忠仁公の邸で美女に墮落  
 し一夜俱臥の折其頸の疵を見出して  
 由来を聞くと果して其女が往々自  
 身に頸を捨斬れた女兒の復活した  
 のをたつたちう譚は今昔物語を大分  
 改変して出したた井澤長秀も註した  
 如く唐の韋固の傳より作出した物

門 76  
 號 3956  
 巻 2

月下氷人(三) 系圖終の話 南方能登  
 前世的悪業に因て五百賊に對して佛敎譚  
 命た美人の



む明日あけのひ奴市やつこいしに行き彼あまは堰いが抱たいた女児こを

を判さして去さつたが一命いちめいに障さいり無なく眉まゆ

に創つくいた斗たりたたつた十四年じゅうしゅうねん経たつて相あひ

州しゅう太守たいしゆ王泰わうたい其女そのむすめを幸あゆ固こに嫁かす常じょう巾きんに

眉まゆ間まに花はな鈕にうを賂ろうじ客きやく色しき無な類るいた年とし頃ころ

相あひ割われて後のち向むかふと妾めかけは王泰わうたいの養やしな女むすめで

父ちちは宋そう威せいの宰さいをた父ちち死し後のち乳うは母はた

養やしなれ市いちに出でて菜なを賣うり活くわ計けいとした

一日いちにち賂ろう来きたて判さんが眉まゆを傷きけ左ひだり斗た

り命いのちに別わか際さい無なつた泰たい喜きを哀あはれんで養やしな

女むすめと一ひとと云いふ其そのかろ幸あゆ固こが不ふ思し

議ぎの老らう人にんに遇あつた店てんを定てい婚こん店てんと名なけ

たと有ある、結むす縁縁神かみを月げつ老らう又また月げつ下げ老らうと

呼よぶは是こゝに囚とらふ、又また媒なぐさ人ひとを氷こ人にんと云いふ

のは五ご日にちの令れい狐こ策さくと云いふ男おとこ氷こ上じやうに之これて

氷こ下げの人ひとと泣なつと妻つまに何なにの事ことか解わか

ら女むすめ所ところえ友とも人ひと索さく統とん来きたて解わかて日ひく、氷こ

上じやうは陽やうで男おとこが氷こ下げは陰いんで女むすめが石いし氷こ

上じやうに在ありて氷こ下げ人ひとと泣なつたと妻つまに

は男おとこの為ために女むすめと泣なつた人ひとんで君きみが人ひと

こ某なにかを頭あたまおれ相あひ炎えん周しゅうふて春はる水みづが半はん



天野 信景の鹽尻卷之五に伊行歌解

やうぬ人の心は辛からむ結の神を

恨こつて哉公朝歌「夜半の常陸の神の御言

にて人の妻をも結ぶ也鳥草冬神和言

皇常陸帯の條下に云く常陸國には

男女の中らぬをさはんは是と云

物を帯にして一には懸想うと男の

名を書き一には我を言て鹿島神

の御前にて祝詞を申し帯を折返

して帯をば懸して申す彌匠に結は

す也夫を悪かすべさ申らひは離

るに結はれ善くまは掛帯の様に

圓に結ひ紐がこゝをもさすと思ふ様

の男なるは頭て掛帯の様に打かけ

つと云を是我國往古婚を成し侍了

に神に占ふて其縁を定る風俗也然

と公朝の歌人の妻をも結ぶと云は

不負不義の事も野俗の習しに有し

にや濃州垂井の驛にや結明神有り

告傳に小單が故事有んと云は甚卑

い	は	有	い	せ	は	外	帯	歌	結	今	持	と	は	く	と	て	也
か	違	難	び	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
支	い	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
那	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
の	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
例	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
一	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
つ	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
丈	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
舉	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
人	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
に	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
山	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
堂	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也
持	無	難	人	ぶ	固	無	帯	の	雑	時	主	帯	今	論	云	元	也

考に唐宰相張嘉貞五女に各一絲を  
 持て縵後に在しめ、郭元振して前人  
 で幸を得た者を妻しめると、五色の  
 絲の中紅絲を引て第三女を得たと  
 有る、福引で嫁取とは捌けた仕方だ、  
 必竟元振が豊々たる人物で張宰相  
 の娘も何れ劣り無く五人共才色雙又全  
 彼も此も捨難い標致をかつたから手  
 早く福引で決定したのを、本報に  
 女部や嫁取を聞取にした事か、屏  
 西鶴や自笑の本に載て居る、半可  
 通輩が文體温謹にして此の浮辞無  
 しと崇む、米國の文豪ワシントン、  
 アーヴグンズの旅人譚の第三節若  
 さ強盜の自白に山賊輩十六歳の處  
 女を聞取て凌辱し輪り扱親元から  
 贖を納めるとして刺殺す所を詳述し有  
 了、斯る物を傑作杯賞美する西洋人  
 の氣が知れぬ。

明治四十一年六月の早稲由文學六



(8)

四頁に一す記し置は如く唐の事因

が月下老人より自今の妻天子と

女を知ら得る譚の類話が一八九四年

板ハートン譯アラビヤ夜譚拾遺巻

一に在る少々稽田して近所の寺で

初尚代りに漢たる麥酒井本位に屹

度族丁面白く談をか、近來禁酒をか

ら大意を世代價で述べると斯た昔し

アラビヤで主婦が月盈て女兒を生

ぐ為火を隣家へ求めた僕を遣は僕

が火を水の歩く途端女占者に遇し

とお前の主人の子が油生れたらし

いが男か女かと向ふから女たと對

た女台者即座に氣毒かゝ其子成

長して百人の男に煌を賣り次に只

今世子の家に孝公し居る僕の妻と

成て終に蜘蛛に殺さるゝ事よと言

た僕之を聞て今其家の孝公人とて

は自今半た百人に賣はれ、古金を

と	取	く	生	覚	と	夫	愛	成	双	最	奴	武	人	金	を	業	相
助	腹	て	れ	れ	妻	其	ヲ	度	の	早	が	老	々	を	奪	出	戴
か	を	歸	了	ぬ	言	妻	事	と	美	賣	有	婆	の	儲	取	し	も
ら	割	來	時	が	く	の	至	の	女	姪	子	に	跡	け	り	、	氣
ぬ	て	て	僕	亡	自	腹	れ	心	存	は	と	方	て	を	直	が	
と	て	何	に	母	分	に	り	に	り	止	と	無	故	割	に	利	
見	行	故	火	に	生	癩	久	又	又	た	業	い	郷	て	家	取	
下	方	と	を	因	れ	有	し	所	賣	是	所	一	へ	一	に	れ	
母	知	は	取	た	大	了	く	懸	姪	非	懸	人	歸	と	歸	と	
の	あ	知	り	は	時	を	持	念	を	に	念	位	こ	憂	て	憂	
情	り	を	に	冬	の	不	で	念	麗	と	念	も	と	ひ	今	ひ	
で	た	妻	遣	の	事	喜	後	を	て	な	に	如	若	生	生	一	
創	一	を	了	夜	故	し	一	か	正	ら	名	何	し	れ	れ	計	
を	史	奪	と	妻	一	了	日	女	妻	出	高	故	見	た	女	を	
			少	か	向			十	十	正	い	た	た	児			



其時に今此と大事の急所を以て寧ろ突

て呉れたなう妻や死あす死あす死た

苦何時の世に何なう報ひにて斯

したう枕の教々情み玉へと斗りに

て聲を放て哭さけり、情聴居た夫が

心中最心元無つたは彼女占者の言

か百人に賣姪したのと生れた時唯一

の寿公人なつた自考の妻と成た迄

此女の成行に聡と合て居る、一っ残

事なう免れさせ、南方君同然中

煉土で堅固左宅を建て、奪一足入ぬ

様内部を漆喰で塗工詰た故蜘蛛の来

こびき隙も無し、加之二人の婢を置

て不新拭掃除して蜘蛛を防がせた

其に夫婦永く位で無事なつたが一

日何處からとも無く天井に蜘蛛一

つ居るを夫が見付ると妻是社喜う

命取へき敵を先んおれは蜘蛛を制

をいじ  
（真実）

何分妻が手から殺し遣うと敷園  
 くを夫制すれと聞入す、木片を取て  
~~其~~ 蜘蛛を打つ力筋て木片折ル飛  
 び其肩か妻の手手に刺ち手から  
 かり體其かろう心臓迄腫及して死を  
 とは、何と生れ、時から人の運命は  
 定つた證據で無か、と書て居る、此ア  
 うビヤ譚と韋固の支那話と孰れか  
 古く出来たか、今ろぬが、前回述べた港  
 作塔た物とし、か見えぬ。

熊楠 五年前の早稲田文学六月號

で注意し、道を通り、今昔物語巻十  
 六の十九束に下り、者宿のた、家  
 主婦、其夜、急に子を産む、時に此旅  
 人の側を通つて、長八尺許りの鬼  
 が外に出、様、年、八歳、死、様、は、自  
 言と云て去た、人に語、おに、暖、疾、く  
 出て、國に下りて、九年目に返上、了、途  
 中、其家を憶して、後宿り、前年宿つ





にせうと 議定して 全く跡を 絶た

長者 建て 此事を 聞さ 靦然 喜か 色

仕懸を 始めた のを と 氣負て 寺に

推さ 斯様 に 妻の 落度 の為 御一同

今更 足を 停止 せられ 外聞 写

からぬ 何卒 従前 如く 來臨を と 望

むので 僧等 後た 來て 供養を 受た

長者 妻 が 後た 無禮を 為す を 氣遣

ひ 自分 僧に 食を 供さ 向を 妙支女

甲 聖者 は 如是 足端 如是 腰背 脚頭

西 目乃 至 頭頂 と 繫念 分別 して 便

ち 極重 愛染 を 生じ 遂に 欲火 に 内

外 燒燃 さ ぬ 遍體 汗流れ 奄に 命過

た 長者 僧を 供養 し 竟り 室に 入て

見よと 事切 たり 止を 待た 日晩 に

土 色 の 毛 體を 妙支 女の 屍を 裹

林中 に 葬 所ろ え 卒に 五百 辟 城

籠衣 采 故 諸親 葬を 停め 屍を 捨て

城に 入り 防守 諸賊 葬具 の 此 嚴

葬









● 験動も持上つた人かやと如来

廣長舌を振つた末、妖媚く容姿を

作する女、斗り、の更れ、出懸て過失を

生ずる僧を越法罪と結戒し、玉ふ

た十誦律には妙法女、歎して、姪念

猶已まぶ、姪龍と放た、有工、清姫

の譚杯、此に、基いた物、歎、●、本文に引

たア、う、じ、や、譚に是等の話の趣を

教程綜合し居るは古話学者が東

に、熟考を要す、事と注意し置く。

佛敎の三藏中、業因の為、●、知ず、に、乱

倫に累り、一家の系圖、紛乱の極に達

した、話は、青蓮華比丘尼に止ま、了、此尼

の傳の初方に、自今が、生た、女兒に自

今が、傷を付けて、家を、立退、た、が、後年

其疵痕に、使つて、親子と判つた、事か

有る、最古く、書留ら、れ、た、譚か、必ず、最

古く、行は、れ、た、物、な、ら、ん、た、は、日、本、文

那ア、う、い、ア、其、他、に、行、た、れ、た、此、種、の

穴のつぎのつぎの穴

諸話しよめは多少たせう此この青蓮せいれん免かた傳でんにあつてし作しり

れた物ものといひ言い符ひとあ善ぜんとあ考かうれて混ま雑ざつの

起おこらぬ様よう免まづか上かみのの諸しよ類るい話わをあ序あた

次第しだい下した有あるは是こから彌いまま立たてしてし唐たう

三藏さんざう法師ほうし義淨ぎじやう譯やく根こん本ぽん說せつ一いつ切せつ有あ部ぶ毗ひ

奈耶なや卷まき四よ九くをあ經きやうとし七しち年ねん前ぜん出しゅつ校がうラ

奈な耶やスすトとンん英えい譯やくシしエえフふネねルるのの西せい藏ざう諸しよ

談だん算さん十じゆ章ぢやうをあ參さん取しゆして少せう々く手て製せいのの滑か

稽きをあ雜あえは本ほん傳でんにあ取しゆ懸かることこ口こう上せう左さ様よう

時じ得とく双しやう尸し羅ら城ぢやうにあ長ちやう若じやく有ありま妻つまをあ娶めとつ

久くしからぬ一いつ女によをあ生せいるこ身みにあ三さん

徳とくをあ具ぐ了りやう寺じ音おん蓮れん華かうあ如ごとし一にあはは身み

黄わう金こん色しきであ猶なほ華け香かうのの如ごとし二にあはは眼め紺こん

青せい色しきであ華けのの如ごとし三にあはは香かう氣き氛ふん靄い

猶なほ華け香かううあ加かしと有あるは青せい蓮れん華か梵ぼん名めい可か

トとハは新しんトとハは唐たうであ啞あ鉢ぱつ羅ら華かとあ譯やく

しし又また音おん義ぎ葉えつ譯やくして青せい喞う鉢ぱつ羅ら華かとあす

頼らい光くわうのの穴あなのの穴あなのの穴あな云い如ごとき重言ごんなながが意い

がが善ぜん解げここ振あらるにあ念ねんをあ入いれたのなな一いつ體たい蓮れん

は印度いんご固有こゆうの物もので吾國わがくにや支那しなに在あ

るのは印度いんごから傳つたれたのかと思おもふ

増ま及つ日ひも昔むかしは有あたか今いまは絶たた

市いち小せう宛えんに舟ふね蓮はすは印度いんごで上古じやうこから人ひと

の目をめを惹ひき随したがて其その色香いろかに變めて早はやく

培養ばいやしし色々いろいろと變かり種むねも出いで諸佛しよぶつの印いん

相そうとしし佛徒ぶつとに尊とつとばれ今いまの印度いんご教きやう人じん

も毗紐びしん天てんの印相いんそうとし又また其妻つまかてう

蓮はすの如ごとしの毒どくの變物かひものとして之これを重おも

真言まごん宗しゆには女陰にょいんを紅蓮くげんに比ひべ九く意い

か多おほい埃あは及つて最さい初しゆ創そう生せいの神かみ「レ」か

又また「レ」大海たいかいに泛うかんが蓮花れんげから生うれた

と云いふ大英たいえい類典るいでん卷九くわんきゆう頁五げいご一いつ蓮はすと女にょ

陰いん崇そう辨べんの圓えん係けいは一いつ八はち七しち五ご年ねん紐にゆう育いく再さい

板ばんウウエエスストト口くちツツ乃の及つウウエエ一いつククの古ふる

代だい印いん鏡きやう業ごう辨べんを見みて明あめよ佛經ぶつぎやうに種しゆ

々ごと蓮はすを今いま別べつして未み陀だ利り花げ蓮れん分ぶん陀だ

利り滿まん開かい白はく蓮れん迦か摩ま羅ら半はん開かい白はく蓮れん屈くつ摩ま羅ら

未み開かい白はく蓮れん鉢はつ特とく摩ま羅ら紅くわう蓮れん摩ま訶か鉢はつ特とく摩ま羅ら大たい

紅蓮べにしろ 拘勿くわぶつ 投な (黃蓮華)わうれんが 等有とら 了わ  
てうせうのあじゆん  
 大師おんし 法雲ほううん 編へん 翻譯たんやく 名義なごう 集しゆ 不ふ 八はち 此内ここのうち 紅白べにしろ

蓮はす で、二種ふたしゆ が日本にほん に生な 見み 通とほ リ 本ほん 土と の  
 蓮はす で、黄蓮わうれん 花が は然しか らず 蓮はす と 日類にちるい 別べつ 属ぞく

睡蓮すいれん の一いつしゆ 種しゆ な、然しか らず に 珍ちん な事こと に 極ごく  
 樂らく の 繪え の 通とほ リ の 黃わう 金こん 色しき の 花はな 咲さ く の 蓮はす

が 西せい 半はん 球きゆう に 在あ り、故こ 矣や 田部たべ 良らう 吉きち 博はく 士し  
 の 述じゆつ 著しやく 日に 本ほん 植しょく 物ぶつ 稀ひ 一いつ 頁げつ 百ひゃく 七しち 頁げつ 蓮はす

花はな は 西せい 印いん 度ど 島しま に 生せい ず、極ごく 書しよ 有あ り  
 は 弘こう 法ぼう に 生せい ず、米まい 國こく 東とう 部ぶ に 多おほ 数かず

い、廿にじゅう 三さん 年ねん 前ぜん 予よ 埼さい 玉ぎよ 縣けん 人にん 飯はん 島しま 義ぎ 太た 郎らう  
 と 云い ふ 大だい 学がく 生せい と ヒ ヲ 一いつ 口こう 河がわ を 瀨せ リ

湖こ 水すい 極ごく 左さ 廣ひろ 所しよ 出で ず と 満まん 目め 金こん 黃わう の 潮しほ 蓮はす  
 花はな で 填うづ り 居ゐ る た ん で 極ごく 樂らく の 前まえ を 流なが した

阿あ 弥み 陀た 川がわ 蓮はす の 外ほか に 異こと 草くさ 無な し  
 と 櫻さくら 井い 茎かき 俊しん が 手て 製せい の 教くわう を 證しん と し

て 宗そう 祇ぎ を 四よ ま せ た と 云い ふ が、米まい 國こく 人にん に  
 は 河がわ に 蓮はす を 詠えい ち 怪あや し ね 事こと と 極ごく 樂らく

感かん 心しん し た が、何なに ぞ 教くわう 殿でん は 空くう 空くう 極ごく 樂らく  
 往わう 生せい に 是こゝ 餘よ 程ほど 早はや 過とほ ず、今いま 少すく し 娑しや 婆は 女にょ で

と●に	青蓮花	岡明河	文	故	尊	ル	の	巴	ち	了	業	治	舊	其	ふ	返	罪
細葉	蓮花	明河	か	佛	んで	自	種	で	青	だ	了	善	念	は	か	した	業
の	に	の	ま	や	で	生	ひ	是	蓮	ろ	了	産	し	は	右	た	を
の	へ	の	い	美	盛	す	い	も	華	ろ	と	を	し	は	の	事	積
蓮	し	題	支	人	に	す	下	睡	は	本	女	伸	て	真	七	有	む
有	花	聚	那	の	培	し	埃	蓮	学	傳	好	行	所	に	工	る	か
り	弁	名	邪	の	た	は	及	属	名	に	の	て	を	真	一	高	面
其	に	考	を	此	相	埃	と	に	三	関	米	正	買	本	口	野	白
葉	は	廿	花	花	だ	及	印	隸	二	係	人	真	占	邦	河	の	と
の	は	六	に	此	を	で	度	本	四	尤	日	の	め	の	え	御	合
形	非	た	花	花	を	之	の	當	一	石	皆	佛	來	佛	往	朝	点
狭	ず	に	に	花	を	を	信	の	二	子	佛	に	來	徒	て	前	し
く	天	佛	に	花	を	神	度	蓮	三	さ	歸	を	來	御	の	の	と
長		眼	に	花	草	草	造	属	四	羅	開	開	來	覽	靴	引	引
		を	に	花	と	と			五				來				
			に	花					六				來				
			に	花					七				來				
			に	花					八				來				
			に	花					九				來				
			に	花					十				來				
			に	花					十一				來				
			に	花					十二				來				
			に	花					十三				來				
			に	花					十四				來				
			に	花					十五				來				
			に	花					十六				來				
			に	花					十七				來				
			に	花					十八				來				
			に	花					十九				來				
			に	花					二十				來				



くして 下の方 少く 丸く 上方 漸く 廣

し 其形 佛眼 に 似たれ ば 喩え 云

也 目頭 の 方は 丸く て 目尻 の 方 細く

長き を 云也 とて 新譯 華嚴 音義 を 引

き 其葉 狭長 近下 小圓 而 漸 尖 佛 眼

似之 經多 為 喩 其葉 似 蓮 稍 有 刺 也 と

有る が 蓮 属 に も 睡 蓮 属 に も 狭 長 い

葉 有る を 南 越 既 に 上 に 引 た 本 文 に も

青 蓮 女 の 眼 紺 青 色 で 華 葉 の 加 し と

辨 に 相 違 無 い 極 下 芝 葉 似 蓮 稍 有

刺 也 と 是 所 外 常 刺 有 蓮 花 子

刺 有 然 と 有 た の 蓮 中 睡 蓮 華 嚴 音 義

に 青 蓮 華 に 死 た の 日 本 支 那 印 度

に 産 す 茨 洛 に 鬼 蓮 の 事 なる 是 ば

蓮 科 蓮 や 睡 蓮 と 別 属 の 者 也 葉

花 を 開 くと 東 國 に は 少 い 物 と 見 え て

往 年 山 師 が 不 忍 池 中 へ 少 々 植 て 花

咲 た 時 豊 年 の 微 に 紫 の 蓮 が 出 た と

紀新報原稿用紙 (24)

吹廻り 貨船で 観せて 儲けたと

圃た、河内 和泉 紀州 の 和歌山 より 東

北に多いが 其より 南には 一向見ぬ、

濱寺 公園 宮武 氏邸 に 近い 小池 にも

有る、依て 不二 新南 の 景氣 派に 蓄殖

せて、其實を 支那で 鶏頭 鴈頭 杯呼

食ふから 餅でも 作つて 配つたら 佳

らう、但し 鶏頭 餅では 毛唐持と 聞

れ 鴈頭 餅では 鄙猥 畫に 近いから 考物

青蓮 華の 講釋 に 餘程 暇取て 本傳を

忘れ 相故 復 桑蒂 かり 遣道 夫、印度 得

又尸 羅城 の 長者 妻を 娶り 相久しから

おして 青蓮 華 同然の 三徳 印ち 黄全

色の身 紺青の 眼蓮 華の 香氣 を 具れ

た女 を 生む 廿一日 の 印度の 風習

の 健盛 親族 集り 議して 青蓮 華色と 名け

た (梵 語で) ウト ハウ ガ ワル ナ) 一人 娘

で 兄弟 連も 有れば 養子 婿取て 家

を 嗣 とうと 辱了 内 田心 城内 長者の



す	と	對	え	た	變	友	左	物	め	言	振	哉	全	體
何	の	譯	を	と	押	返	し	向	れ	て	事	實	を	詳
く	話	し	た	か	青	蓮	華	女	何	か	下	女	か	意
趣	有	て	母	と	夫	を	説	証	す	了	ん	か	ろ	と
疑	ふ	た	下	女	真	を	告	て	疑	は	る	を	哀	し
ミ	時	節	到	り	は	親	ら	見	今	成	れ	と	云	た
次	回	に	復	た	母	と	夫	が	室	内	に	籠	つ	左
の	を	見	定	め	下	女	か	主	婦	に	告	た	主	婦
往	て	見	了	と	有	う	事	か	婚	と	姑	が	非	法
を	行	は	婚	る	清	蓮	女	見	て	思	ひ	心	願	ふ
矣	し	地	考	く	此	悪	婆	は	如	何	に	男	に	事
也	欠	て	婚	と	契	了	を	又	此	人	は	何	程	
女	に	事	欠	て	姑	と	暈	む	を	と	無	明	の	業
火	直	上	三	千	文	何	と	堪	え	無	て	夫	に	
向	ひ	出	悪	人	今	ら	リ	後	勝	手	に	姑	と	何
な	り	と	做	な	と	言	り	様	に	鏡	か	に	生	れ
て	教	日	左	了	女	兒	を	夫	に	地	付	と	見	
出	外	れ	て	闕	上	に	落	ち	頭	を	破	つ	て	血
逆	了	青	蓮	女	今	は	雪	隠	め	大	事	を	燒	妻
に	放	り	恥	を	覆	さ	ん	為	頭	巾	を	冒	り	跡

不 便 の 仕 方 を 高 人 の 例 と し て 到 り	旅 故 郷 恋 杯 出 来 ぬ と 言 ふ 諸 人 其 は	妻 青 蓮 女 も 末 度 城 の 宅 に 留 め 獨 り	を 伴 有 れ は 饗 應 の 準 備 自 在 な る 者 は	六 青 蓮 女 の 夫 を 尋 ね て 様 御 尋 執 れ て 妻	故 汝 は 一 度 も 昔 筆 を 饗 せ ぬ を と 問	を 饗 し て 昔 筆 斯 く 汝 を 饗 す る に 何	到 著 て 菅 葉 中 流 高 主 交 代 に 此 高 主	女 の 故 郷 得 又 尸 羅 城 に 向 ふ 無 事 に	を 預 け 後 金 を 持 て 高 塚 を 組 と 青 蓮	度 城 に 著 し 高 賣 事 濟 で 自 宅 に 青 蓮	ふ 高 主 大 愧 で 即 座 に 夫 婦 と 成 て 末	才 工 人 の 妻 と な り 并 是 れ 旦 那 と 答	吉 に 夫 無 し 誰 に ま れ 吉 に 衣 食 を 給	属 魂 戀 著 し て 汝 は 誰 の 妻 を と 問 に	左 高 主 青 蓮 女 の 儀 貌 端 正 左 工 を 見	旅 は 道 伴 世 は 情 け と 入 殿 し て 出 立	之 行 く と 末 度 城 え 向 ふ 高 塚 に 逢 ひ	を も 顧 み た 家 を 出 で 心 死 し 無 く 進
---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---



見當りつたら  
伴來て  
差上人  
と折言ふて

芝場は散々  
た、  
其妻  
青蓮女  
を賣揚す

斯て高主  
餘り  
其妻  
青蓮女  
を賣揚す

を悪く思ふて  
諸友か  
懸命に成て得

又尸羅城中を  
搜すと、  
青蓮女の標徴

に少しし、  
達は  
お年は  
彼女か  
娘と云

ても通丁  
程若い  
黒上大々吉  
加之に

一向男  
知ず  
素女  
を見出した  
から

高主に  
告すと、  
其様な  
甘い  
詐に欺さ

と果して  
人言の  
如く  
なつた  
高主  
鼠

色う涎を  
垂して  
打悦み  
何分  
宜しく

と諸友に  
世話を  
頼む  
話終  
つて  
此

素女を  
要て  
第二妻  
とし  
た  
双貨物を

賣て  
金を  
儲け  
末度  
城へ還  
つた  
か  
早

城  
●  
近く  
成ると  
一寸  
要事  
●  
岩山の邊

に荷物と  
新妻を  
置き  
一人  
空手で  
電

へ歸る  
其姿  
こそ  
淋し  
けれ  
留守は  
殊

更女と  
氣の  
旅高主  
を亭主  
に持  
ち  
江戸

長崎  
國々  
え  
往し  
やん  
した  
其跡  
で  
一





く	石	女	笠	進	物	貫	の	と	か	五	つ	の	笑	連	少	て	と	に	思	
取	金	腹	し	に	だ	は	下	言	ら	國	た	主	ひ	只	し	の	問	戻	ふ	
還	は	立	居	に	と	は	女	た	若	色	事	人	出	今	前	通	ふ	つ	頃	
し	復	し	た	青	と	う	な	ら	い	を	は	か	し	出	に	り	、	て	夫	
て	つ	さ	リ	蓮	林	と	り	お	新	妻	曾	今	和	出	書	折	青	来	の	
来	た	を	暫	女	月	弱	と	前	書	に	て	度	女	で	く	角	蓮	を	舊	
た	か	決	く	は	て	ふ	、	程	を	持	無	程	も	往	奪	長	女	知	で	
と	と	と	し	黙	青	も	、	の	伴	作	い	大	人	た	取	旅	答	今	今	
言	問	芝	て	つ	連	寄	寄	美	て	ら	金	儲	か	い	れ	し	え	度	も	
ふ	ふ	に	夫	た	去	近	て	人	來	今	く	け	良	ふ	を	て	定	訪	夫	
青	と	忍	か	儘	た	れ	足	が	を	度	無	で	過	と	儲	め	め	て	夫	
蓮	天	比	歸	サ	思	女	を	切	其	得	事	せ	了	其	廿	て	決	れ	と	
女	幸	心	了	然	懸	程	洗	て	美	又	に	、	此	所	五	汝	を	主	同	
は	と	心	青	と	無	の	は	御	し	尸	程	所	所	歸	全	を	人	人	時	
眼	目	れ	蓮	し	さ	注	せ	側	さ	羅	負	歸	に		を	は	は	は		

は	し	こ	死	と	の	に	巻	ち	以	事	吐	て	の	住	將	来	五	は	と
事	て	支	死	と	の	に	巻	目	以	事	吐	て	の	住	將	来	五	は	と
物	見	解	た	灼	后	聚	に	目	漢	有	て	身	お	て	ん	詐	恥	濕	と
集	物	し	了	ま	昭	め	し	を	呂	ぬ	代	せ	代	空	と	り	と	と	と
に	し	て	屍	苦	信	た	て	去	后	事	は	う	御	御	確	得	知	夫	と
村	た	毒	を	し	は	た	さ	り	は	が	直	該	登	か	又	居	妻	と	と
一	と	薬	取	さ	王	美	し	耳	威	や	潰	二	れ	に	尸	下	同	と	と
昔	漢	と	出	の	の	人	も	を	夫	を	丸	軒	媛	聞	羅	何	下	と	と
し	書	共	し	の	高	を	高	重	人	か	子	の	無	て	か	隠	下	と	と
止	に	に	陰	の	帝	壺	帝	べ	を	又	と	家	し	居	取	と	何	と	と
事	見	護	中	の	の	に	の	瘡	を	該	申	に	に	居	れ	隠	と	と	と
無	れ	で	に	投	寵	投	寵	薬	飲	に	し	位	三	て	え	と	と	と	と
さ	、	煮	椽	井	愛	い	を	を	せ	室	歩	大	遠	、	と	と	と	と	と
常	甲	靡	村	に	を	廣	一	飲	を	に	く	慮	は	入	は	と	と	と	と
貴	本	ら	ち	投	燧	川	身	せ	断	兩	男	此	入	ぬ	は	と	と	と	と
	下		心	て	鐵	王	身	實	断	西	推	處	ぬ		直	と	と	と	と
															茶	と	と	と	と
															并	と	と	と	と
															細	と	と	と	と

め	交	し	夫	夫	の	く	萬	ひ	焼	手	世	七	ス	傳	全	雙	名	族	の
●	替	夫	人	人	城	ア	國	に	事	に	の	十	ト	ふ	全	又	を	族	夫
●	凌	人	人	人	に	キ	人	に	に	強	命	三	ラ	ふ	子	を	を	族	夫
●	辱	を	の	の	宿	テ	名	事	ら	辱	に	の	シ	一	と	白	を	族	夫
●	身	馬	外	字	して	ン	字	起	れ	さ	に	高	ア	州	見	ろ	を	族	夫
●	半	り	出	書	て	公	卷	●	た	れ	り	齡	の	に	て	又	を	族	夫
●	所	落	●	六	其	ギ	(	リ	は	上	二	で	美	も	居	加	を	族	夫
●	路	し	乗	十	夫	ロ	十	(	若	馬	日	佛	后	紀	る	藤	を	族	夫
●	し	全	七	●	人	四	十	一	か	裂	續	王	ブル	元	内	重	演	族	夫
●	疲	夜	多	世	と	世	十	八	っ	に	け	ク	ル	六	髪	氏	じ	族	夫
●	瀕	宸	勢	紀	通	ト	●	四	た	し	て	シ	イ	百	か	は	三	族	夫
●	死	を	を	の	歡	ワ	世	三	九	て	兵	ル	ニ	十	蛇	妻	目	族	夫
●	せ	し	率	東	す	ル	紀	年	時	卒	ヤ	ル	ル	三	と	と	鏡	族	夫
●	し	て	て	近	公	子	の	年	婦	創	ル	ニ	ド	年	成	妾	と	族	夫
●			包	近	の	子	の	年	婦	を	ル	ル	ア	年	て	か	星	族	夫
●			圍	近	の	子	の	年	婦	を	ル	ル	ウ	年	言	か	星	族	夫

め ● 交 替 凌 辱 身 半 所 路 し 疲 瀕 死 せ し

め ● 交 替 凌 辱 身 半 所 路 し 疲 瀕 死 せ し

め ● 交 替 凌 辱 身 半 所 路 し 疲 瀕 死 せ し

觀... 姑等とした

二年板二七二頁

是等 ~~抄~~ 抄 是 青蓮女よりすつと

後の出来事 をか 無 論 本 傳 に は

出て 居 無 い 然 し 女 の 姪 姪 程 忠 子

べく 慎 む べ き 者 は 無 い ち ゝ 教 訓

の 為 書 入 れ た の を 法 螺 貝 少 し 無

い から 讀 む と 損 に 成 る ぬ の こ と 夫

に 子 女 の 心 得 に 成 る 又 本 文 難 解

に 據 り 空 に 西 妻 有 ば 水 を 飲 む 暇

子 無 し 一 不 諒 有 る 出 有 る 一 家 に 西 妻

有 ば 羹 汁 厚 味 冷 し と 評 し 居 る 律

藏 の 唐 と 西 藏 に 傳 っ た 本 が 大 分 相

差 不 所 有 する の だ 更 と

此 通 り 女 の 姪 姪 程 姪 物 は 無 い 今

家 え 新 書 を 納 ら び 此 度 備 と 彼 と

競 争 不 和 惡 語 の 断 間 と て は 者 者 ち

と 斯 ら 夫 が 理 を 分 て 喧 言 た 辯 解 を

した が 書 連 女 は 益 柔 順 し ぐ 其 様 事 は

お 構 へ 遺 存 早 う 其 女 を 伸 て 來 存 さ

過	を	飯	も	を	れ	暮	は	お	い
て	畢	も	有	伴	て	し	眞	リ	信
如	竟	雪	了	て	夫	や	實	少	が
何	青	隠	教	來	も	せ	娘	し	無
な	蓮	行	訓	た	大	う	の	若	て
了	女	も	體	是	に	と	様	く	も
椿	其	忘	の	か	心	心	に	は	も
譚	故	れ	妙	ら	落	危	心	妹	淋
を	郷	子	文	の	著	か	得	と	し
か	か	程	で	南	き	ら	て	見	い
惹	ら	程	後	方	走	親	和	あ	も
起	來	面	を	流	往	切	融	つ	の
す	た	白	書	の	て	に	一	と	其
其	新	く	言	艶	新	望	所	若	人
は	婦	成	と	も	毒	ま	に	く	妻
又	に	ん							
次									

55748

